

信心の現在性

—「念佛と餘善」—

本學短講大
學部教授 藤原幸章

「たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」とはわれわれの信心のすべてであつて、ここでは眞實なるものは念佛一つよりほかにはない。ところで念佛一つがまことうけとられるためには必ず信心を要とする。然らば信心とはどのような構造をもち、それはわれわれの行に對してどのように働くものであらうか。善導は『觀經』の三心を結釋して「三心既具無行不成」とまでいうている。これは信心さえ確かであるならばいかなる行も成就せざるはないとの意味に解釋せられる。とすれば信心と行業、念佛と餘善の關係はどのようにうけとつたらいいのであらうか。これが私のテーマである。そうして私はこの場合特に善導の行業論を手がかりとしようとおもう。

念佛は佛の本願に誓われた正定之業であり、自餘の諸善は佛願に順じない行であるから全く比較にならないとは、善導淨土教の根本基調である。然るに善導はまた一面われわれの三業起行の上にも眞實の行を認めている如くでもある。このことに師の著作中特に『具疏』の上に顯著であるが、既に本疏たる『觀經疏』そのものの上にも充分に認められるところである。それ

ゆえに、善導の提撕をうけた法然の信仰につながる淨土門の諸派、特に西山系の人々の間には早くから三心の信心を介する諸善の躰りが強調せられて來たところであるし、宗祖においてもまた謙抑ながらこのことが説かれていた。(特に晩年の書簡等に於いて)。然しながら善導と雖も三心の信心さえ確かであるならば、三業起行が直ちに皆眞實となるといひ切る程樂天的ではなかつた。このことは同じく三心釋における深刻を極めた人間内省の告白において明らかである。それゆえに「三心既具無行不成」といひ放つた行も、現實には「眞實信心の稱名」に限られるべきであらう。そうしてこのことさえ決定すれば正定業の念佛を中軸としてわれわれの身口意業の上にもそのひろがりか認められてもよいであらう。蓋しかくの如き擴がりの上にこそ眞實の信心がわれわれの現在に働く具體相があり、念佛者の豊かな日常があると考えられるからである。信心は一度び獲て後は静止したまま動かないという如きものではなく、常にわれわれの主體となつて現在に働き出るべき筈のものである。それゆえに信心はいつとり出してみても時々刻々が現在であり、いつでも珍らしく新しいのである。(『御一代問書』)。このような信心の現在性こそ信心の根本性格であつて、それはかの二種深信において適確に表わされている。ここでは先ず機の深信において「自身現是罪惡生死凡夫」と示される。それは昨日でもなく明日でもない。正しく現在が罪惡深重であり虚假雜毒である。しかもそれは同時に「曠劫以來常沒常流轉」という過去をうちに包みつつ「無有出離之緣」の未來を孕む、いわば絶對の現在である。それゆえに「自身現是罪惡生死凡夫」という現在

において遠々の過去から流轉し來つた自己が知られ、同時に未來永劫に出離の縁なき自己が知られる。されば信心における自己はいついかなる場所に於いても現在が雜毒虛假であるというより外はない。法の深信に於いても亦同じく絕對現在において示されている。「禮讚」の深信釋には特に法の深信に於いて、「今信知彌陀本弘誓願及稱名號下至……」とその現在性を表わしている。ここでも同じく明日でもなく昨日でもない。今、彼の願力に乗るのであり、「今日今時聞要法」(『法事讚』)である。かくして信心に於いては常に現在が中軸となつて現に今自己は墮ちるものでありつつ、従つて今現に救われなければならぬといわれるとき、曠劫の過去から未來際を盡して一切の時空がこの一念に極まるのである。それ故に信の一念は「信樂開發時剋之極促」といわれ、同時に「廣大難思慶心」と讃えられるのである。かくして、ここにおいては常識的に過去から現在へ、更に未來へと移行行くものではなくて、逆に現在が軸となつて過去が、また未來がここに極促せられ、常に現在から現在へと形式をとる。信心はいつでも新らしく、一つことを聞いても常に珍らしいといわれる所以である。まことにこのような現在性こそ信心の根源の性格である。善導が廣く身口意の三業に及ぼした正行とは、正しくこのような現在に働らく信心の具體的表現に外ならない。それゆえに善導における正行とは「往生經の行に依つて行ずる者」であるからとか、信心によつて淨化せられた行であるから正行であるのではなく、現在に働らく信心に支えられて煩惱具足のわが身が煩惱具足と知られ、それゆえに定散の自心をはなれた行であるからに相違ない。從

つて信心の現在に於いては、常に私の行は批判せられて雜毒虛假となり、信心さえ確かであるならば私が思い立つてこの雜毒の善を回向する如き愚かなことをする筈がない。信心が特に「信心の智慧」といわれる所以である。かくして信心は常に現在に動いて行の批判者として働らき、雜毒を雜毒としてありのままにしらしめると共に、このものためにする大悲に對して慚愧と報恩の根源となる。従つて信心の智慧に入れば依然として煩惱具足の身でありつつ、「そくばくの業をもちける本願」が悲しまれると同時に、「たすけんとおぼしめしたちける本願」がかたじけなくよろこばれる身となつたのであり、「信心の智慧に入りてこそ佛恩報ずる身」となつたのである。ここでは機の深信は單なる自己否定に止らず、虛假不實の自己と知るゆえにこそ愈々自らが愼しまれる。既に自らの不實に氣付くことそのことが私の現在に働らく信心の相に外ならないのである。不實なものとは他人ではなくて自分自身であり、従つて救われるものも不實な自己そのものと信知する時、その時無底の慚愧と無限の責務が荷われてくる。「親鸞一人がためなりけり」との叫びがわき上る所以である。

かくして信心は現在の自己の軸となつて、昨日でもなく明日でもなく今日今時自己は墮ちるものでありつつそれゆえに救われるものであるとの確信を内に包んで、われわれをして「佛恩報ずる身」と轉せしめる。まことに信心が私において働らく具體相こそ「應報大悲弘誓願」といわれる報佛恩の世界である。ここでは現在の信に立つて未來成佛の確信に支えられると共に曠劫來流轉の過去に對しても却つてそこに世々々々の佛恩が仰が

れる。宗祖が十九・二十の要・眞二門に對しても「假命之誓願……果遂之誓良有_レ由哉」とほめ、「爰久入_ニ願海_ニ深知_ニ佛恩_ニ」
 といひ、さらに、廣くすべてを生かして「遇獲_ニ行信_ニ遠慶_ニ宿
 緣_ニ」_一といわれる所以はここにある。

かくして信心が現在に働くということはあらゆるものを生かしゆく原理であり、すべてに對して佛恩を仰ぐ基底である。それゆえに「幾度も廢立をもつて先と」(『改邪鈔』)し、阿彌陀一佛にのみ歸命する眞宗も「諸神諸菩薩をおろそかにせず」(『御文』)、ただ念佛のみまことといいついよいよ身口意の業が慎しまれ、更には疑謗さえも獲信の縁と轉ぜられ、又この法をそしめるものに對してもあわれみの心がもたれるのである(宗祖書簡)。ここにこそすべてを生かすすべてに佛恩を荷う信心の現在に働く具體相がある。上來しばしば言及した善導の「三心既具無行不成」とは、實にこのような信心の現在性を最も動的にいい表わした言葉であるといふべきである。

考古學的にみた上代寺院の性格

奈良國立博物館
館長文學博士 石田茂作

上代という言葉の意味については多少の異議もあるが、ここでは、大體、飛鳥・奈良時代を指し、この時代の寺院が、どんなものであつたか、を考へてみたいと思ふ。これについて、文獻的に考へられないこともないが、私は、考古學的な立場から考へてみようと思ふ。文獻というと、奈良時代の文獻、寺に

關する文獻は、非常に寥々たるもので、それだけでは及びもつかないので、もう少し他の面から考へねばならない。

そこで考古學的立場から、上代寺院の性格を、考へようと思ふ。考古學的に上代寺院の性格、姿を究める方法として、上代寺院の相を考へるのが一方法である。古い寺院の相をみつめることにより、當時の寺院の性格が分かると思ふのである。私はかつて古い寺の堂が、どんな風に建てられたか、について興味をもち、特に名高い大きな寺の圖面をいろいろ集めたことがある。そうしてそれを比較して見ると、或る何か様式の相違、建築の相違が、その宗派、時代によつて違つてゐるのを感じた。

こうした見方で、上代寺院について考へてみると、まず今の寺では門・本堂・庫裡があれば、最低限の寺が出来上がるが、奈良時代以前の寺院では、それだけではなく塔が必ずある。次に金堂がある。金堂は後世の寺で、本堂という言葉で呼ばれてゐるのに相當するが、それは金が衆寶の中最も優れてゐるため、諸堂の中で一番重要な堂という意味で名づけられたものである。

この他に講堂がある。これも當時の寺院には必ずあらねばならないものである。それに廻廊があり、門があり、僧房、鐘樓、經藏がある。寺院と名のつくものには、最低限これだけのものが必要であつた。この他に寺院によつては、食堂、浴室、宿舎があつた。處で、今の寺院と、上代寺院との性格の相違であるが、周知の如く、塔は釋迦の骨、舍利、即ち現身佛を祀る所である。金堂はその理想佛、つまり歴史的な釋迦でなく、絶對といふものを表現した佛、即ち如來を祀つた所である。上代寺院が、この二つをもつてゐる事は、當時の寺院は理想佛を祀る事